

アーサー・コナン・ドイル作

伊豆野 良江訳

クルンバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izuno

第十三章 仏僧ラム・シン

その日の夕食のとき、わたしは三人の仏教徒について耳にしたことを父に話して聞かせた。すると、思った通り、父は非常に興味をそそられたようだった。

そして、ラム・シンが優れた言語学者として父に敬意を払っていることを聞くと、大喜びしてすぐにも挨拶しに行こうとしたほどだった。

わたしとエスターは、そんな父をなんとかなだめすかして靴を脱がせ、ようやく寝室まで連れていったときには心底ほっとした。タベからの騒ぎは、繊細で体も弱い父には大いにこたえていたはずだ。

わたしは夕闇の迫るポーチに腰をおろして、昨晩立て続けに起こった出来事を思い返していた。嵐、難破船、救助、不思議な生存者。そのとき、妹がそっとわたしの近くにきて、その手をわたしの手に重ねた。

「ねえ、ジャック」妹は優しくささやいた。「わたしたち、クルンバーの友達のことを忘れていない？ 今度の騒ぎで、あの人たちの心配や危険のこと、頭から消えてしまっただんじやないかしら」

「頭から消えても、心からは消えたりしないよ」わたしは笑って言った。「でも、確かに忘れていた。あしたの朝クルンバーに行つて、様子を見てこよう。いよいよ、あしたは運命の十月五日だね。あと一日待てばきつと何もかもうまくいく」

「でも、悪くなるかもしれないわ」

「ずいぶんふさいだ顔しているじゃないか。いったいどうしたんだ？」

「心配でしょうがないのよ」妹はわたしに身を寄せて、身震いした。「なんだか、モーダントたちの身に恐ろしいことが起こるような気がするの。あの変な人たちはどうしてこんな所に留まっているのかしら」

「ああ、あのお坊さんのことかい？ きつと宗教上の祝日とかいろいろなしきたりとか、それなりの理由があるんだろう」

「だって」エスターは恐ろしそうにささやいた。「よりもよつてこの時期に、わざ

わざいन्दからやって来るなんておかしくない？ それに將軍はいन्दやいन्द人を怖がっているっていう話じゃなかった？」

これにはわたしも考え込んだ。

「そう言われてみれば、將軍がああなったのは、いन्दで起こったことと関係があるような気がしたな。でも、ラム・シンに会ったらその心配も消えるはずだよ。まさに知恵と博愛の化身なんだ。肉や魚を届けようと言っても、動物の命を奪ってまで生きようと思わないと言って断るんだからね」

「わたししたら、びくびくしてばかりみたいね」妹は気を取り直して言った。「ねえ、ジャック、一つだけお願いがあるの。あしたの朝、クルンバーに行つて、変なお坊さんが来ていることを伝えてくれる？ 意味があるかないかは、あの人たちの方がわかるでしょう？」

「わかった」わたしはそう言いながら、妹と一緒に家の中に入った。「おまえはこの騒ぎで気が立っているんだよ。ぐっすり寝ればおちつくだろう。とにかく、おまえの言うとおりだから心配するな。追いつかどつかはクルンバーの人たちが決めるだろうからね」

その時は妹の不安を静めるためにそう約束したが、翌朝になって明るい光の中で考えてみるとばかばかしく思えてきた。あの菜食主義者の人たちが悪だくみをしているとか、彼らがクルンバー家に何か影響を及ぼすなどということがあり得るだろうか。

とはいっても、ヘザストーン家の様子は気になり、朝食後クルンバー館まで歩いて行った。一家のような隠遁生活を送っていたら、最近の出来事は何にも耳に入っていないだろう。だから、伝えるニュースがたくさんあれば、將軍もわたしを邪魔者扱いすることはないに違いない。

館は相変わらず、陰鬱で荒廃した雰囲気だった。正門の太い鉄格子から覗いてみたが、誰の姿もない。アカマツの太木が一本強風で倒されていて、その赤く長い樹幹が雑草の生えた並木道に横たわっていたけれども、そのまま放置されている。敷地内のすべてのものが荒れ放題で、打ち捨てられた感があった。唯一その重々しい板塀だけが、難攻不落の構えを見せて立ちはだかっていた。

わたしは塀をぐるりと回って、以前の逢引の場所まで行って見たが、隙間は一つも見つからなかった。屋敷内を覗けないように横木を重ねて補修されたため、今まで使っていた穴もなくなってしまうていた。

そして、逢引を將軍に見つけた、あの忘れられない場所まで歩いて来た。すると、例の二本のゆるんだ横木の間に二インチほど隙間があった。そこから家の窓や芝生の一部が見えたものの、どこにも人の気配はない。わたしは誰か出てくるまでそこに腰を据えて、待つことにした。館を包む死のような静寂は、わたしを心底ぞっとさせた。ヘザストーン家の様子がわからずに帰るくらいなら、將軍の怒りを買つことになっても塀を乗り越えようと心に決めた。

しかし、幸いにもそんな非常手段をとる必要がなかった。二十分も待たないうちに、鍵を開ける音がして、將軍本人が正面玄関から出てきた。驚くことに、軍服を着ていたが、通常の英国陸軍の制服ではない。色褪せた奇妙な型の赤い上着、黄色く変色した白いズボン。胸に赤い肩帯をかけ、腰には軍刀を身に着けている。まさに四十年前の東インド会社付将校が過去からよみがえったようだった。

そのあとから、あの浮浪者だったルーファス・スミス伍長が、いまや立派な服に身を包んで現れた。彼は足をひきずりながら將軍に追いつくと、二人で何やら真剣な話をしながら芝生を行ったり来たりし始めた。そして、時々そのどちらかが立ち止まり、不意打ちを恐れるようにあたりを配っている。できれば將軍とだけ話をしたかったが、スミス伍長は一向にそばを離れようとしなない。仕方なく、持っていたステッキで塀をたいて注意を引いた。二人は弾かれたようにこちらを見た。肝をつぶした様子だ。

わたしはステッキを高くあげて合図した。將軍は勇気を奮い起こすようにこちらに歩き出そうとしたが、スミス伍長がその手をつかんで引き止めた。わたしが大声で自分の名と、他には誰もいないことを伝えたとたん、將軍は走り寄ってきてわたしを快く迎えたのだった。

「やあ、ウェストさん、よく来てくださった。こついつ時に誰が本当の友かわかるんですな。中でゆっくりしてもらえないのは残念だが、とにかくお会いできてうれしい限りだ」

「ずいぶん心配していたんですよ。しばらくお会いしていませんでしたからね。皆さん、お元気ですか」

「まあまあですな。しかし、あすが来れば変わる。生き返ったようになりませぬぞ。な、伍長？」

「は、そつであります」伍長は軍隊式の敬礼をした。「明日からは万事順調にいけます」

「伍長もわしも今は落ち着かんが、何もかもうまくいくと信じておるのです。結局、すべて神の意のままですからな。それで、君の方はどうしておったかな？」

「大変忙しくしていました。難破船のこと、お聞きではないですよね。」

「ぜんぜん知らんね」將軍はそっけなく言った。
「嵐で号砲が聞こえなかつたんでしょうね。おとこの夜、湾で船が座礁したんですよ。インドから来た大きな船です」

「えっ？ インドだつて？」將軍は叫んだ。
「ええ。でも、運よく乗組員は全員助かつて、グラスゴーに出発しました」

「全員出発したんですな！」將軍の顔色は死人のようだった。
「いえ、不思議な仏教徒が三人いて、その人たちは二、三日海辺に泊まるそうです」その言葉が終わらないうちに將軍はくす折れ、やせ細った長い手を天に掲げながらひび割れた声で叫んだ。

「御心の行われんことを！」

塀の間から見えるスミス伍長は顔色を黄色くし、しきりに額の汗をぬぐっている。

「ついてねえな！ やつとのもので温かいベッドにありついたらと思っただらこれだ」

「心配するな」将軍は氣力をふりしぼって立ち上がり、肩を怒らせた。「何が来ようと、帝国軍人として立ち向かうまでだ。チリアンワラーの戦いを覚えておるだろう？

おまえは大砲を捨てて退却せざるを得なかった。そして、シーク教徒たちがわれらの陣地に攻め寄せてきたではないか。そのときも我々は怯まなかった。今度だって怖気づくものか。久々にすつきりした氣がする。わけのわからないものに悩まされるよりましだ」

「まったく。あのチーン、チーンって音はうんざりだ。最後まで閣下と一緒にするのが、せめてもの慰めでさあ」

「ウエストさん、では失礼します。ガブリエルをよろしく頼みますぞ。家内の面倒もみてやってください。あれもそんなに長くはないと思うが。それじゃ、お元気でー！」

「待ってください」わたしはそう言って、迷わずに塀を一枚ぶちぬいた。「いつもそういう回りくどい言い方ばかりされては、何のことがさっぱりわかりません。もういいかげん、話してもらえませんか。何を恐れていらっしゃるんです？ あのインド人ですか？ それなら、父の権限で身元不明の浮浪者として捕えることもできます」

「いや、いや、それはいかに」将軍は首を振って言った。「すぐに何もかも明らかにするはずですよ。この件に関する書類のありかは、モーターントが知っているから、あしたあいつと相談するといー」

「でも、もし危険が迫っているなら、何か手を打たなければなりません。詳しく話していただければ、何かお力になれるかもしれませんよ」

「ウエストさん、打つ手などないのです。あとは覚悟を決めて、なりゆきに任せるしかない。守りを堅くして隠れようとすると愚かしいことだ。だが、恐ろしくて何かせずにはいられなかったのですな。無駄だとわかっていても、ただ手をこまねいているよりは、予防策を講じる方がましだった。わしと伍長はめったにないほど絶体絶命の状況に追い込まれたのです。こうなったら神様におすがりして、この世で苦しんだ分、来世では幸せにもらうことを祈るだけです。ああ、こうしてはおられん。書類を焼却したり、いろいろやることがあるのですね。では、失礼」

将軍はわたしがあけた穴から手を差し入れて、わたしとおごそかな握手を交わしたあと、伍長を従えて決然とした様子で屋敷に戻って行ったのだった。

わたしはひどく動揺し、いったいどうしたらよいものかと頭を悩ませた。妹の直感はずしかった。クルンバー館の人たちの危険には、あの三人のインド人が深く関わっているのは間違いない。ラム・シンの高貴な顔立ちや洗練された振舞い、そして思慮深い言葉と暴力行為を結びつけるのは難しかったが、よくよく考えてみると、あの太い眉と心を貫くような黒い眼の裏に、すさまじい憤怒が隠されているような氣もしてくる。確かに最も敵に回したくない相手だ。

それにしても、卑しい砲兵伍長と名だたるインド英国軍の將軍、あれほどかけ離れた二人が、どうして彼らの恨みを買ったことになったのだろう。それに、危険が迫っているのに、なぜ捕えることに反対したのだろうか。もっとも、曖昧な理由でそんな手段に訴えるのは、わたしも不本意ではあったけれども。

疑問は堂々巡りをするだけだった。しかし、二人の言葉や顔色には、彼らの恐怖が根拠のないものではないと思わせる何かがあった。すべてが謎だった。それも絶対に解けない謎だ。

ただ一つ明らかなことがある。將軍にはつきり断られた以上、事情に通じていないわたしは手をこまねているしかないということだ。危険が過ぎ去るのをじっと待ち、せめてガブリエルやモーダントが無事なのを祈ることしかできない。

わたしはそんなことを考えながら、いつしかブランクサムの庭に面したくぐり戸まで歩いてきた。そのとき、非常に興奮した父の声がして、はっとした。

父は最近独自の研究に没頭していて、日常的な話題に関心を持つことはまずなかった。いったいどうしたのだろうと、くぐり戸をそっと開け、足音をたてずに月桂樹の茂みを回った。なんと父の相手をしていたのは、仏僧のラム・シンその人ではないか。

二人は庭のベンチに腰かけ、何か重要な問題を論じているようだ。インド人が茶色の長い指を震わせながら主張するのに対して、父は顔をゆがめ、両手を振り回して大声で反論している。

二人は議論に熱中するあまり、わたしがそばまで行ってもしばらく気づかなかった。やがて、先にラム・シンが気づいてさっと立ちあがり、前日と同じ威厳に満ちた気品のある態度で挨拶をした。

「きのう、お父上をお訪ねする機会を得たいものだと思っておりましたら、きょうこうして伺うことができました。サンスクリッド語とヒンズー語に関して、いくつかが意見を聞かせていただいております。こうして、一時間以上も議論しているのですが、お互いに納得する結論に達していないのです。東洋学者として名高いウエスト氏が深い学識をお持ちで、わたしがとうてい及ばないのはわかっております。ただ、わたしがたまたま一点だけに目を向けましたところ、お父上の見解には根拠が薄いと思われる点があります。それを指摘させていただいたのです。これは断言できますが、紀元七百年まで、いや、それより後にも、サンスクリッド語はインド人によって日常的に使われていたのです」

「これははつきり言えますがね」父は熱くなって言った。「その時代には、もうサンスクリッド語は死語になっていましたよ。唯一使われていたのは、学識者が学術的もしくは宗教的な著述を書くときだけですな。ちょうどラテン語が、ヨーロッパの人々が話さなくなっただけから、中世まで学者たちに使われていたのと同じです」

「ヒンズー教の聖典『プラーナ』をご覧になれば、そのご意見には賛同できないことがおわかりいただけるでしょう」

「古代インド叙事詩『マラーヤナ』や特に仏教の戒律の正典を参照されれば、議論の余地がないことが明らかです」

「しかし、クラヴァツガはどうなのですか？」ラム・シンは熱心に食いさがる。

「アショーカ王をご覧なさい」父は得意そうに声を張り上げた。「紀元前三百年に、紀元前です、王は岩にブツダの戒律を刻ませたが、いったいそれは何語だったのか？ サンスクリッド語か？ そうではない。なぜかという、下層の人々には理解できなかったからです。ハッ、ハッ。これをどう論破されますかな？」

「王は様々な言葉で刻んだのです。しかし、いつまでもこのような議論を続けるわけにはまいりません。太陽も中天を過ぎたようですよ、そろそろおいとまして、連れの所に戻ります」

「お連れの方にもお目にかかれたらよかったです、お会いできなくて残念です」父は礼儀正しく言った。たぶん、議論に我を忘れて、十分もてなせなかったのではないかと思っただろう。

「あの二人は世間とはいっさい関わりません」ラム・シンは立ち上がりながら言った。「わたしより位が高いので、いっそう汚れを嫌うのです。今は第三顕現の秘儀を悟るため、六か月間瞑想の行に入っております。我々がヒマラヤを出て以来、ほとんど休むことなくその行を続けているのです。では、ウェストさん、もうお会いすることはないと思いますので、お別れを申します。あなたは当然ながら幸せな老後を過ごされるでしょう。あなたの御研究は、英国の学問に輝かしい業績を残し、文学にも多大な影響を与えるに違いありません。では失礼します」

「わたしも、もうこれきりお目にかかれたいのですか？」わたしは尋ねた。

「海岸まで送ってくださいるなら別ですが。でも、今朝も外出されてお疲れでしょうから、ご無理ならささないでください」

「いいえ、喜んでお供します」わたしは心からそう答え、わたしたちは一緒に歩き出した。父もついてきたが、しばらくすると息切れし、しぶしぶ家に引き返した。またサンスクリッド語の議論を始めようと思っただけ、歩きながら話すのは父には無理だったようだ。

「お父上は大変博学でいらつしやいます」ラム・シンは父と別れてから言った。「しかし、学者にはよくあることです、自分と違う意見に対して、かたくななところがありになりますね。いずれおわかりになるでしょうが」

これに対して、わたしは特に何とも答えなかった。しばらくの間、わたしたちは歩きやすい波打ち際を黙々と進んだ。

海岸線の左手には、延々と砂丘が続いて視界を遮っている。一方、右手には果てしなく開けた海峡があり、その銀色の水面には帆影一つない。大自然の中に、わたしたちは二人きりだった。

もしこの僧が、航海士の思っているような危険人物で、ヘザストーン將軍の言葉から

推察されることが事実なら、わたしの運命は彼の掌中にあるのだという考えが頭をよぎった。

けれども、その思慮深く堂々とした態度や、静謐で深みのある黒い目を見ると、そんな恐れや疑いなど、軽々と吹き飛んでしまった。確かに、その顔つきはこわいほどに厳格ではあったが、悪事を働くような人間にはまったく思えなかった。

時々、彼の気品のある横顔や漆黒のあごひげに目をやって思ったのは、荒いツイードの旅行用のスーツが痛々しいほど似合っていないことだった。彼の威厳や優雅さに合う唯一の服は、ゆったりした東洋風の衣装なのだろう。

ラム・シンがわたしを連れて行ったのは、何年も前から住む人のない漁師の小屋だった。荒れ放題で、茅葺き屋根の一部が風で吹き飛ばされ、ドアも窓も壊れたままになっている。奇妙な仏僧たちは地主の招待を断って、どんなに貧しい乞食でも尻込みするよくなこのボロ小屋を選んだというわけだ。ラム・シンはいばらの生い茂る狭い庭を通り、壊れた戸口に近づくと、中をちらつと覗いてからわたしを手招きした。

「ちょうどいい時になりました」彼はかしくまった様子で、小声で言った。「ヨーロッパでこれをご覧になる機会はめったにありませんよ。小屋には、二人のヨロガ行者がおられます。解脱に最も近い段階に達した方で、今恍惚とした無我の境地に至っています。まあ、そうでなければお連れすることはできなかったでしょう。お二人の精神は肉体を離れ、チベットのルドークにあるラマ僧院の聖火祭に参加されています。どうぞ足音を立てないようにお入りください。そうしないと、勤行を妨げることになってしまいますから」

わたしは忍び足で雑草を押し分けて進み、そと中を覗いた。中も侘しい限りで、でこぼこの床には敷物もなければ、家具もない。隅には、新しい藁の山が積んであり、その藁の上に、二人の男がいた。一人は皺だらけの小男、もう一人は骨太だがやせた男で、あぐらをかき、頭を深く垂れている。

どちらもわたしたちにまったく気づいた様子はなく、規則正しく緩やかな呼吸をしているが、ブロンズ像のように身じろぎ一つしない。顔色は気味の悪いほど灰色がかっていて、ラム・シンの健康的な褐色とは対照的だった。かがんでよく見ると、眼球が上を向き、白目だけが見えている。

二人の前には小さなむしろが敷かれ、その上に陶器の水差しとパン半分が、神秘的な文字をつづった紙とともに置かれていた。ラム・シンはそれをひととおり見てから、わたしを庭に連れ出した。

「今夜十時まで邪魔することは許されません。あなたがご覧になったのは、霊肉分離の行で、我々の密教哲学の最大の成果の一つです。今ガンジス河畔にいるお二人の靈魂は、実際と同一の肉体に包まれているのです。ですから、まわりの信者の誰一人、ラル・フーミとモードル・カーンがその場にいることを疑う者はいないでしょう。まず肉体を化学的原子にまで分解し、それを超光速で任意の場所に運び、原子を再構成して元の

形態に戻す。それは、我々の力によってのみ可能なことなのです。昔、まだ我々が無知だった頃は、肉体全部を運ばなければなりませんでしたが、その外側だけを構成する分だけを送る便利な方法を会得しました。これをアストラル体と呼んでいます」

「そんなに簡単に靈魂を送れるなら、肉体を伴う必要なんかあるでしょうか」

「高僧どつしなら靈魂だけで十分ですが、俗界と接触するときは目に見える形が必要なのです」

「いろいろと興味深いお話を聞かせていただいて、ありがとうございました」とわたしは言い、ラム・シンと握手をした。「短い間でしたが、忘れられない思い出になると思います」

「何かわたしの話がお役に立てばいいのですが」ラム・シンはゆっくりと言いながら、なかなかわたしの手を離そうとしなかった。そして、真剣な面持ちでわたしの目を覗きこんで、悲しげに続けた。「この先どんなことが起こっても、あなたの偏った正義感に合わないからという理由で、一概に悪だと決めつけないでほしいのです。判断を急いではなりません。この世には、個人の利害を越えても守らなければならない大きな掟があるのです。これはあなたには冷酷無残に思えるでしょうが、それを見過ごすことで前例を作ってしまう危険に比べれば、本当にささいなことです。我々は牛や羊を害することはありません。聖者の血で手を汚した人間を生かしてはおくべきではないし、必ず死が与えられるはずですよ」

威嚇するように両手を振りかざしながらこう言い放つと、彼はわたしに背を向けてぼろ小屋に戻っていったのだった。

わたしはその姿が見えなくなるまで見送ってから、家へ引き返した。帰る道々、不思議な僧の言った言葉、特に最後の激しく投げつけるような言葉がよみがえってきた。

はるか右手には、クルンバーの館の白い塔が、黒雲を背景にくつきりと浮かび上がっている。たまたまここを通りがかった人は、こんな豪邸に住んでみたいものだと思つていない。まさかその住人に不可解な危険が迫っているとは、思いもしないだろう。あの黒雲は、今襲いかかるつとする沈鬱な運命を暗示しているのではないか。

「何が起こつても、それは神の御心だ」わたしは叫んだ。「無実の者が罰せられるようなことがあるはずがない」

家に着くと、父はさっきの論争の興奮がまだ冷めやらぬ様子だった。

「なあジャック、さっきの客に失礼をしてなければいいんだがね。わしは地主代理だから、客と口論はするまいと思っていた。しかし、相手がとつてい受け入れがたい説を持ち出したもんだから、ついやり込めずにはいられなくなつてな、とつとつ論破したよ。おまえには細かい点がわからないから、それに気づかなかつたかもしれないが。わしがアショーカ王の件を持ち出すと、すぐに立ち上がって退散しただろう？ あれが決め手になつたんだ」

「みごとな応戦ぶりでしたよ。ところで、あの男に会つて、どついつ印象を持ちまし

たか」

「そうだな。聖人の一人だろうね。サナシ、ヨーガ、セヴラ、カナンダー、ハキム、カファイなどと色々な名で呼ばれていて、一生を仏教の教義の研究に捧げているんだな。あの男は神智学者かその教えの崇拜者だろうが、その連れと共にまだ悟りの境地には達していないようだ。そうでなきゃ、俗人に交じって海を渡ってくることはなかっただろうからね。だが、いずれは如来と称えられる高僧になることだろう」

「でも、お父様」と妹は口をはさんだ。「そんな偉いお坊さんが、どうしてこんなスウェットランドの辺鄙な海岸に滞在しているのかしら」

「そこところはわしにもわからんが、連中が法を守って問題を起ささない限り、わしには関係ないことだ」

「お父さんの言われたような高僧には、不思議な力があるということですが、ご存じですか？」

「東洋の文学にはふんだんにそういうものが出てくる。聖書も元々は東洋のものだが、いたるところにそういう力のことが記してあるじゃないか。かつては東洋人が我々の知らない自然の秘密に通じていたのは、間違いない。しかし、現代の神智学者が、彼らの主張するような力を本当に持っているかどうかは、何とも言えない」

「ああいつ高僧は執念深いのでしょうか。死をもって償わなければいけないような罪があると思いますか」

「わしにはわからんが」父は驚いて白い眉を上げた。「きょうはいやに食い下がるね。いったいどうしたわけだ？ あのインド人たちに好奇心をそられたのかね？ それとも何か疑いを抱くようなことでもあったのかい？」

わたしはあわてて何とかはぐらかそうとした。父が知ったからといってどうなるものだろう。父の年や健康のことを考えると、必要なは休息で、不安にさせるべきでなかった。それに、自分にもよくわかっていないことを人に説明できるはずもない。そういうわけで、父には黙っているのが賢明だろうと思われた。

この十月五日ほど、時間のたつのが遅く思われた日はなく、そのままずっと日が暮れないのではないかとさえ思われた。読書や書き物に庭や小道の散歩。さらに釣竿に新しい毛針をつけてみたり、父の蔵書の目録作りをやってみたり、いろいろな方法で気を紛らそうとした。しかし、ますます不安は募る一方で、妹も同様のようだった。

わたしたちの落ち着かない様子に、父も仕事に集中できないらしく、何度も小言を言われた。

それでも、とうとうお茶の時間になり、カーテンが引かれ、ランプがともされた。それからまた長たらしい時間を過ごした後、就寝前の祈祷があり、使用人たちは自分の部屋に下がった。父もいつもの寝酒を一杯飲むと、寝室に向かった。居間に残されたわたしたちは、恐ろしいが漠然とした不安にさいなまれながら、神経を張りつめていたのだ。